

福島建設工業新聞

(毎週月・水・金発行) 平成25年(2013年)2月27日(水曜日)

根置屋骨
鉄骨構造
体育館

緊急点検、対策が急務

本県など
多く被災

アンカーボルト破断で



日本建築構造技術者協会東北支部、建築研究振興協会東北分室、仙台建築構造設計事務所協会は23日、福島市のコリッセふくしまで講習会を開き、

「を開き、県内外から約80人が参加した。県建築士事務所協会、県鉄骨工業組合青年部の後援。体育館は避難施設となるが、今回の震災で鉄骨置屋根構造の大規模なものに大きな被害が発生し、その機能が発揮できなかった。このため、調査報告と耐震診断・補強設計の留意点を話した。加藤重信日本建築構造技術者協会東北支部長が「テキストに盛り込まれ

た」被害7例のうち3例は福島県のもの。郡山、須賀川の被害が大きかったためではないか。実態を福島の人々に分かってほしい」と本県開催の趣旨を話した。

本県の郡山市総合体育館など代表的な3例が報告された。いずれも3000〜1万平方メートルと比較的大規模で、柱が14〜15本。設計時期も48〜56年と新耐震のものも混じる。これらの屋根と柱をつなぐアンカーボルトが切れたことが長期の使用禁止につながったが、これまでの地震ではこうした被害が見つけられなかったという。

小野瀬順一東北工業大学名誉教授は「強制変形を受けるため、アンカーボルトの数や径の問題ではない。力を逃がす設計をすべき」とした。今回の震災で、本県では10棟以上にこうした被害があったとみられるが、市町村によっては被害を公表しないところもあるという。「鉄骨とRCの結合の仕方耐震診断・補強の仕方が変わる。予想される南海地震に備え置屋根構造の耐震診断と耐震策の緊急点検が必要」と話した。

郡山市総合体育館は濱尾博文氏(エーユーエム構造設計)が被害報告、鉄鋼工業組合の渡辺勝氏(ワインズ)が復旧事例報告を行った。濱尾氏は「本来は避難施設となるべきものが半年も使用できなかったことに大きな問題がある。使用開始までの期間について実態調査も行うべきではないか」と話している。